鹿児島女子短期大学紀要
第39号（2004）79～113頁

ジョン・ダン　その生涯と精神と芸術

4.　野望の芸術　（翻訳）

Translation of John Carey: *JOHN DONNE Life, Mind and Art*

4.　*The Art of Ambition*

後藤廣文
Hirofumi GOTOH

前章でたどったようにダンの作品（詩であれ説教であれ）に彼の性格――前向きで，心配性で，飽くことを知らない――が表されている。その表れ方は必ずしも明確というわけではないし，明確な場合でも好ましいものとは限らない。とはいえこれは重要なことではない。我々が作者に求めるものは人に好かれることではなく，世の中でのさまざまな経験を我々に示す能力だからである。それでも研究者の中にはダンの性格に反発を感じている人もいる。だからといってダンには反発を感じるような性格はないとしてさけるようなことはしないでこのようなダンの性格と向き合って，幸いにも彼の詩的力量を償ってあまりある性格上の弱点とは離れて，作品に表されたダンの特殊な抑圧感と複雑な心境を考えることが必要条件であることを示すのが一番よいであろう。

既に見たように1596年にダンが参加したカディツ港での海戦の二つの対照的な描写から始めるのがよいと思われる。一つ目は遠征艦隊副司令長官であったローリーによるものである。スペインのガレオン船隊が英国艦隊を見て驚いた時ローリーは拿捕されるのはさけ難いと見て乗員に錨を下ろして浅瀬に突っ込むように命令した。

> 兵士が重なるようにして海に転げ落ちた。石炭袋の中の石炭を一斉に撒き散らしたかのように港の至るところに重なり合った。ある者は溺れ，ある者は泥の中に足を突っ込んだ。フィッリプ号とセント・トマス号は炎上し，セント・マシュウ号とセント・アンドルー号の乗組員は延焼する前にボートで救出された。その光景は痛ましい限りであった。多くは溺れ，多くは焼かれながら海に飛び込み，デッキから下がったロープにひっかかったまま海に落ち身体の自由のきかない者も非常に多かった。重傷を負ったまま泳ぐ者も多く，やがて海に沈み苦痛に気を失い死ぬ。それに火炎もひどくフィリップ号の武器庫が炸裂した。炎が迫ってくると，地獄を見たいと思えば正にここに地獄があるかのようであった。[1)]

この光景はダンのエピグラム「燃え上がった船」の主題でもあった。

燃え上がった船は沈める以外に
炎から助けることはできなかった。
水に飛び込む者もいたが，泳いで
敵の船に近づくと弾に撃たれて沈んでいった。
こうして船にいた者はすべて失われてしまった。
海にいる者は焼かれ，燃え上がる船にいる者は水に沈む。[2)]

ローリーのサン・フェリペ号の死の苦しみの説明とダンのこれと比べると優れて人間的なローリーの説明に感銘を受けざるをえない。次々と舷窓から落ちてくる兵士達は煙で黒く，燃え（ローリーの時代の「石炭」には「真っ赤に熱した燃えるおき」の意味があった），地獄に落ちた人のように「いたましい」。びっこになった水夫は水の中でもがいている内に撃たれ「苦痛に気を失い死ぬ」。この句にはあわれみがある。ダンはこの殺りくをしゃれのめし，気の利いたパラドックスの口実にしている。彼の詩行には同情はない。

詩に品性を持ちこむのは馬鹿げたことであろう。ダンはまだ若き兵士で初めての戦闘であった。自らの勇気を鼓舞しなければならなかったし，感傷的になっている余裕はなかったであろう。また，こういった単純な情はダンの複雑で技巧的な詩にはふさわしくなかった。若きイーザーク・ローゼンバーグに友人がダンのこの詩の手稿写本を貸した後「ありきたりのことを書かなければならない場合であっても，ダンがそうするのはとても難しいことであった」[3)] と言ったが，彼の言葉は彼とダンとの違いを説明している。しかし，ダンが他人の苦しみに関して同情を示さないのは彼の詩的技巧のせいだけではない。散文であれ韻文であれダンの詩すべてに見られることである。彼の無関心には驚かされる。例えば，死刑を執行された人の足を引っ張って死を早めようとする見物人に苦言を呈している。17世紀の死刑はその執行法が一般的に未熟で死刑を執行された人の友人達が足をひっぱってその苦しみを短くしようとした。そういう人達は誤っており，「苦しみ」は法で定められたことなので法をあざむいてはならないとダンは言っている。[4)] 更に，説教で「旅に疲れて大いなる町に遅れる者は，そこが町に近いことを知っているのだから，そこが死刑執行の場所であっても喜ぶ」[5)] と思いがけなく言うのを知って震えを押さえられないことがある。

実際「燃え上がる船」の冷徹な歓喜の調子はダンの無情な性格に呼応しており，これが説教の中にも出るのである。例えば，他の人達すべてが溺れ死ぬのを見て箱舟に乗っていて救われた人達が感じたに違いない「言葉には表せない安心」をダンは熱狂的に語っている。[6)] 乞食や17世紀の地方に徘徊する貧窮者達の哀れな群れをひどく嫌ったのもこれと同種である。不幸な人達に対して地位ある人々がほぼ一般的に感じた恐怖と憎しみを考慮するとダンのこのような人々に対する激しい抗議は鎮まることはなかった。「田舎の納屋や玄関にあふれた放浪者やとんでもないごろつきの群れはほとんど洗礼を受けていない」と強調している。従って，このような人達を救うのはキリスト教徒の義務ではなく，助けたとしても神の栄誉は得られない。乞食のような人達は正式に結婚することもなく子供をもうけ，極悪の罪を犯し，貧困故に破産した金持ち以上に悪に追い立てられるとダンは断ずる。それに，彼等は実際のところ望めば簡単に職に就けるのに就こうとしないし，職を選

ぶことすらしない。ダンがこういった貧民を「犬」とか「害虫」とかと非難するのを聞いているとダンの時代では住所不定・無職の者は法律で罰せられ，そのひどい罰のために更に困窮することになると思わざるを得ない。[7]

こういったキリスト教徒としてのダンに潜む利己的な側面は家族や友人達との付き合いに時としてどう表れているのかという関心を生むことになる。ヘンリー・グディアー卿の妻の死に同情するために書いたグディアー宛ての手紙でダンは彼への同情と自分への同情とを比べている。「もし私があなたを慰めるようなことがあったとしたら，貧しい者が貧しい者に与えるのと同じように与えるものの何もない施しとなりましょう。あなたより私のほうが必要性が高いからです。」[8] 慰めの手紙の言葉としては実に奇妙だ。これを書いている時ダンは，よくあることだが，明らかに挫折感を覚えみじめな気持ちであったが妻はまだ死んではいなかった。このような状況では自己憐憫はつりあわないとはいえないまでもぎこちなく思える。グディアーは悲しみのあまりとはいえダンのこのあつかましさに不快感を覚えたであろうか，それとも慣れていてダンの身勝手さに慣れてしまっていて気づかなかったのであろうか。

同じように自己中心的な性格故に引き起された不適切な例が1627年に死んだ愛娘ルーシーの死の説教に見られる。もちろんこれに父親としての悲しみが表されているのは明らかである。ルーシーの死を和らげようと，死んだ者は眼には見えないが絶えず地球を回っているという考え――この考えは他のところに表されたことはない――に固執している。しかし，説教の主題は宗教者として不屈の精神でこの不幸に耐え普通のキリスト教徒「以上に復活」の資格を与えることであった。クライマックスで自らの復活の栄光を表す言葉を模索する姿には気高いものがある。不信心で感傷的な現代人はダンは娘の死をもっと来世への期待をふくらませるような滑らかな書き方をすべきだと心配する必要はない。娘が天国にいるのを見る喜びこそが一番だと思う。しかし，説教の終わりの方での気高い想像力の炸裂にはダン独特の天国にいる喜びが語られてはいない。[9] このことから自らの救済をそこなうようなことを何かしたからというよりは「親や子を亡くしたために神に罰せられる」という趣旨の祈りを他の説教でしていたことが思い出される。[10] 親や子を亡くした者はこういった考え方に余り関心を持っていないということにダンは気づいていないようである。

ダンの利己主義を述べるのは下らない人間として彼を軽視するためではない。社会的・宗教的な意味で倫理的義憤を覚えるような自己中心的な性格がダンの詩においては個性と詩を作り出す力の主な源になっているからである。詩人としてのほぼ絶えることのない自己中心的な性格はロバート・イルロットによって見事に分析されている。[11] ダンが窓に刻んだのは女性の名前ではなく，自分の名前である。「別れ；涙に寄せて」では彼のいない間残しておく女性――あるいは妻――に何が起こるのか何も語られてはいない。関心があるのは自分の身にふりかかる不安である。「埋葬」は女性ではなく彼の身体の行く末についての思索である。概して『歌とソネット』では悲しみの役柄は彼自身に当てられている。唯一「熱病」のみが女性の苦しみを表している。

芸術的完成度は自意識にある。自意識が強くなると，あたかも更によく見ようとするかのように，自己を外在化する傾向にある。「似顔絵による魔術」のように肖像になったり，骸骨になったり，鏡のイメージになったりする。

君の眼を見ていると，そこで
　　哀れにもぼくの似顔絵が燃えている。
さらに下を見ると，君の透明な涙の中で
　　ぼくの似顔絵が溺れているのが見える。[12]

涙に映った小さな苦しみの姿が夢の中のどうすることもできない遠くの哀れな自分の姿のように見える。同じ自己陶酔がダンの中で小さく分割されて，その一つ一つが詳しく調べられ，説明されるのである。「花」の中で無情な女性にとらわれの身となった心に語りかける。

　　哀れな心よ，君は少しも知らない・・・
君は明日太陽が目覚める前に起き，太陽と共に，
ぼくと共に，旅に出かけなければならないのを。[13]

二人以外は誰も知らないかのようにそっと心に知らせる。ダンは自己の内の分裂を良く知っているのでそれぞれに分けるだけでそれがどう感じているか伝えることができるのである。「愛の成長」においても同様にある複雑に分離した有機体の機能を観察するかのように，愛の春の効力を記録する。

かつて思っていたほどにぼくの愛が純粋だったとは
　　とても思えなくなった。
　　ぼくの愛は雑草のように
愛の移り変わりや四季の変化を受けて来たのだから。[14]

ダンの自己中心的性格には自己省察はつきものである。自ら心理分析者になる訓練をし，それをもっともふさわしい仕事だと信じていた。手紙の中で魂のもっとも高貴な働きは「魂そのものを熟考，考察し，伝えること」[15] だと言っている。しかし，自己分析能力を認識する一方で，自己分析してみてそれが不可能だということも認めている。考えるのは自分一人なのだから自分をゆがめて考えることはできない。今見てきた自己を詩的に外在化しようとするのはこの限界を超えようとする試みであるが，超えたものとして自分を欺くことはしなかった。「否定的愛」の中で「我々自身」ははっきりいって「わからないもの」だと言っている。いぜんとして「私自身」は「最もとらえ難いもの」[16] のままである。この点についてグディアー宛ての手紙の中で「心の病には判断するための基準も規則も法則もない。というのは鑑識力，理解力，判断力が判定を下すからである。つまり判定は病そのものによるのである。」と詳しく述べている。自分の心を使っていろいろと実験を試み，自分の気分を制御してみたが，元々判断基準がないのでたいていは失敗し「まだ自分の病を理解していない」ことを明かにしている。自分のことはわからないけれど誰よりも実験を試みるにはよい立場にあると思っていたので「私にわからなかったら，他の人は誰にもわからない」[17] と固執した。

その上自らの病の性質――「謎めいた複雑なもつれた魂」[18]――を自分で知ることができないために否応なくその解明に駆られた。

従って，彼のエゴイズムは彼の想像力と密接にかかわることとなる。その結果彼の詩は他の英国詩人以上に深く個性が刻印されている。「私」や「私を」で一杯なだけではなく，ダンの「私」や「私を」はいつも取り扱いにくい代名詞で，読者には理解しずらい。他の詩人の詩ではこれらを我々の心の中のまじないの一つと受け止め，詩人のいう「私」や「私を」になれる。ワーズワスの

私は感じていた
高められた思想の喜びで
私の心をかき乱す一つのものを・・・

を読んで，語り手の「私」が我々だと想像できるので一層崇高なものを，一層おごそかなものを感じることができる。ダンはこの必要性を認めない。彼の詩には妥協することのないかたくなな性格が残されている。それがC.S.ルイスのような批評家の敵意を買うことになるのである。彼は刺のある個性的な詩よりも寓話のような論理的ではない，わかりやすくうっとりするような詩が望みなのである。

ロバート・エルロットはダンの恋愛詩の中の話者の自己中心癖を分析して「ルナルシスム・ドゥラマン」[19] について述べている。この言葉はフランス語では適切であっても英語の「ナルシシズム」をダンに当てはめてみると直ぐ不当であることがわかり，ダンの詩に表された自己中心癖がどんなものかもっとはっきりさせる必要がある。妙なことに彼の自己中心癖は自己陶酔ではあるが自己讃美ではない。絶えず自己陶酔に向かう傾向はある。ここで再びワーズワスとの対比を考えてみるとわかりやすい。ダンがワーズワスのように「高められた思想」を持っていることを我々に伝えようとしているとは想像できない。ひとりよがりになっていたのでは差し迫った複雑な事情からは逃れられない。更にダンはしきりに自我を越えたものを得ようとしているのだからナルシシスティックになってはいられない。不完全な自己に追い立てられているのである。これはロバート・エルロットがダンにはめずらしく自我が表されていない詩としてただ一つあげている「熱病」にすら見られる。ここでは精一杯自己中心癖をなくそうとしていることがわかる。

ああ，死なないでくれ。君が死んだら
　すべての女性を憎むことになる。
そうすれば，君も女性の一人であったと思って
　君を讃えることもしなくなる。[20]

女性が死ねば彼女の思い出が損なわれるから彼女に思いとどまってほしいのである。しかし，苦境は彼女のものというよりはダン自身のもののようであり，危険にひんしているのは彼女の生命というよりは女性に対する彼の考え方である。論理の面から見ると利己的なダンと巧みではあるがその

無謀な表し方にははらはらさせられる。恋人が死んだら「讃えること」もしなくなるから死ぬなと言われるのはとても耐えられないことだ。とはいえ，もちろんこの詩行には優しさが効果的に生み出されている。というのはダンの言いたいこと以上のことがわかるからである。ダンにとって彼女に対する愛と彼女に関する自らの独特な思考が重要なのであるが，彼女にとってはこの二つが共に同じようには重要ではないということにダンは気づいていないのである。心配そうに二人は危険にさらされていると彼女に警告する。つまり混乱しながらも必死に努力する自我は論理とは無関係なのである。「ああ，死なないでくれ」という命令文は自然な気持ちの表れであるが，女性が入念な計画のもとに自殺を図ろうとしているとはとても思われないのだからこの表現は論理的ではない。

詩が進むにつれてダンは女性の苦境を慰めることに重点を置いて医学，流れ星，天文学の理論を求めて自分の考えに夢中になっていく。彼が彼女を「あなた」というのをやめ，一時的に「彼女」に帰るのは自分の思考に夢中になっているしるしである。

しかし，熱病で彼女が息絶えるはずがない。
　　また，この不当な苦しみが長く続くはずがない。
なぜならば，このような高熱を長く燃やし続けるには
　　多量の腐敗という燃料が必要だからだ。

この熱病の発作は流星のようなもの。
　　君の身体の中でたちまち燃え尽きてしまう。
君の美しさと，君の五体，君そのものは
　　変化というものを知らない天球なのだ。

だが，君の中に長く留まれないにせよ
　　君を捉えていたいという私の思いは熱病と同じ。
君以外のものを永遠に我がものとするよりは
　　一時間でも君をぼくのものにしたいのだ。

この最終行に著された利己的な愛は肯定されるものである。ダンは彼女を我がものにしたいのだ。彼が望んでいるのは彼女を慰めることではない。たとえその思いが熱病のように彼女の熱を高め死に至らしめることになったとしても，我がものとしたいのである。愛を所有するという考え方は我々の現代的な考え方に反するものである。近頃では我々は女性を一人の個性ある存在として尊敬しなければならないと信じているかのように注意深く話すようにしている。ダンはこんな振りなど払いのけ死んでも彼女を自分のものにしたいという気持ちがそれに合った韻律に乗せられて語られる。「熱病」に自己中心癖がまぎれもなく表されているということは別にしてもう一つダンが求めているものがあることに留意すべきである。愛されている女性が単に愛すべき女性として描かれているだけではない。彼女には普遍的な重要性が授けられているのである。ダンは彼女が死ぬと世界は蒸

発すると断言する。

世界の魂である君が死ねば,
　この世界は君のなきがら。
最も美しい女性は君の幽霊にすぎず,
　最も優れた男性も腐った蛆虫にすぎない。

これは殊にダン的な途方もない言い方だ。詩想が無比のものに向かうのはダンの詩に絶えず見られる特徴である。彼の詩魂が絶頂あるいは天頂に押し上げられるように感じるのである。また，彼が描いている女性が他のものに変えられるのも特徴的である。詩想が高まると女性は宇宙の原理あるいは無比の力や美徳の象徴に変えられる。超越できないものを言い表そうと言葉の限界に挑み，あらゆる個人としての特徴を持った女性が何千フィートも下に落ちてしまい見えなくなる。

*

この至高のものへの憧れはダンのこれまでの失敗や失望のみならず，自己分裂意識や気まぐれに耐え切れなくなって必然的に生まれたものとして見ることができる。[21] しかし，彼が切望したものは本来実現できないものである。後にダンはこの魂の飽くことを知らない追求心を人間を不滅へと駆りたてる神意による特別の手段と考えるようになったのである。神はあらゆる人間に「生きている間には満たせないほどの果てしない，定まることのない望みを刻み込まれた」[22] と説明した。しかし，この考え方を出すずっと前の詩に超越したものへの要求がはっきりと示されている。それは思ったほどにはおべっかに嫌悪感を感じない彼の性格に原因の一端があったのである。ベッドフォード伯爵夫人やハーバート婦人へのお世辞を詩にする時，始まるか始まらないかの内に，単なる事実は置き去りにして最高位のものに向かう。『周年記念の歌』では真実から生まれる感情の高まりはずっと扱いやすかった。というのはエリザベス・ドルアリーのことはまったく知らなかったので彼女に関する正確な印象を述べることはできなかったからである。従って，絶対的なものの間で急上昇したりらせんを描いたりすることが自由にできた。

『周年記念の歌』でダンがエリザベスについて語っていることは，もちろんエリザベスを歌った詩のほうがずっと長いが，「熱病」の女性について語っていることと非常によく似ている。エリザベスは「熱病」の女性のように世界霊である，あるいは，あった。つまり「この世に命を与える形相」なのである。彼女が死んだ今は「この世はなきがらにすぎない。」人間は「蛆虫のようなもの」に過ぎず蛆虫の中で生まれる。この世に残された美徳はいずれもエリザベスの「亡霊」に過ぎない。ダンはまた，エリザベスを構成するものは「熱病」の女性と同じく天球を構成するものに似ているので純粋すぎて病気にむしばまれることはないと主張する。[23] 主張するものは同じである。いうまでもないことだが，「熱病」がエリザベス・ドルアリーと関係があることに疑問の余地はない。エリザベスのために書いた詩には常習的ともいえる至上のものに対する願望が見慣れた言葉で表されているからである。

「熱病」より長い『周年記念の歌』はダンの想像力の範囲を広げた。見せかけの意識から解き放

たれて詩は突飛な曲芸飛行をしながら上昇する。エリザベス・ドルアリーは創造された宇宙を崩壊から守っているとわれわれは確信させられる。というのは人間の行動に価値があるのは彼女のお陰だからである。彼女は「図書館の本をすべて」読み，彼女の眼は西インド諸島に金色の光を与え，胸は東インドに芳香を与えたからであり，「このような世界なら20」でも造ることができるほど豊かであったからだ。楽しいけれど合理的とはいえない主張が何頁にもわたって続けられる。同時にエリザベスの死後の恐ろしいこの世の状態が熱をこめて吟味される。ダン以外にこのような自由な創意に富んだ詩を書く詩人はいなかったし，過剰なものに対する好みを次から次へと満たす詩人はいなかった。

『周年記念の歌』で実際驚くべきことは批評家達が引き起こした誤解である。ジョンソンは『周年記念の歌』は「神を汚すもので，冒涜に溢れて」いるが，処女マリアについて書いたのなら「かなりのものであっただろう」[24] と見ている。しかし，ジョンソンは明らかに自分が意地悪をしていることを認識していた。ダンに自分の詩を論じさせようと挑発していることは明らかだからである。しかし，ダンは何も言わなかったので論戦は難しかったに違いない。とはいえ彼の計略はうまくいった。ダンは「描いたのは女性のイデアであって彼女そのものではない」と答えたのである。誰でもこの答えは実に率直だと思うことであろう。が，批評家達はこれをわざと誤解したのである。ウイリアム・エムプスンは「女性のイデアを描いたもので彼女の死によって太陽が地球に落下しているとは思ってもみなかった」[25] と異議を唱えている。しかし，ダンはイデアという言葉を17世紀には一般的であった「理想」の意味で使っており，彼にとって理想とは現実を越えたものでなければならなかった。彼がジョンソンに言ったのは『周年記念の歌』制作中絶対的に完成されたものを心に描いていたということである。ダンは途方もないものを書こうとしていたのである。

現代の研究者はダンの率直な説明を無視して『周年記念の歌』でダンが「実際に」書こうとしたものは何かということを見つけようとして頭を悩まし，奇妙な結論を導き出している。マーリアス・ビューリーは『ダンの詩における宗教的冷笑』[26] の中で『周年記念の歌』はエリザベス・ドルアリーに見せかけて密かにローマカトリック教会を讃えるという「たわむれの毒を含んだしゃれ」だという考え方を提唱している。D.W.ハーディンはこの詩の主題は母親あるいは子供の頃愛情を注いでくれた完全な母親像で，それが薄れて行くにつれてこの世が失望の地になっていくことだと言う。[27] リチャード・E.・ヒューズは，事実を全く無視して，この詩は聖ルーシーに関するものだとみなしている。[28] フランク・シマンリーは自らの『周年記念の歌』の注釈書で，学識をひけらかして，ダンは実際に神の栄光――この世の神の内在を表す流出に関する神秘哲学体系における最後の流出――を描いているのだと読者に確信させようと苦心している。[29]

いずれの批評家も考えることは同じである。詩に突飛な言葉が使われると普通の人はそういう言葉を使うにふさわしい主題があるに違いないと思うからその主題を一生懸命捜すことになる。想像力によって生まれる文学を研究する方法としてはこれは思わしくないように見えるが，これが研究者の間に広がることによって文学に対する関心を引き起こすことになるのである。バーバラ・K.・レワルスキーの『周年記念の歌』はこの考え方に沿ってかなり重要な主題を捜し求め，エリザベス・ドルアリーは再生した魂だから彼女の中に恩寵によって復活した神のイメージを描いているのだと

いう考え方を提示している。[30] しかし，すべての再生した魂の中に神のイメージが宿るというのは明らかに問題である。ダンはエリザベスを無比のものとして扱っているからである。この欠点はレワルスキー女史自身が知っており，自分でも「パラドックス」だと書いている。しかし，彼女の説に支持できないのはこの点だけである。

ダン自身の説明に戻ってみよう。彼の説明は我々が知っている彼の想像方法と完全に一致するものである。彼は考えつく限りに誇張したものを具体化するために言葉を拡大解釈して理想のものを追い求める。これは発見されたことのない誇張表現への旅である。友人への手紙で，今自分がしようとしていることは理想のものを追い求めることだと飽き飽きしたように繰り返し書き，問題はエリザベス・ドルアリーを全くといっていいほど知らないことだと強調していることである。「というのはこの淑女に一度も会ったことがないので真実のみを語ったと誓っても理解されない。」彼の想像力を限界にまで広げるために「心に抱いた一番よいもの」[31] を描く計画であったのだ。

『周年記念の歌』に対する正当な評価はあまり悲しみが描かれていないということである。4才で死んだエリザベスの妹ドロシーを書いた数年前の作者不詳の讃歌と比べてみればよくわかる。

まだ幼い，多くのことが約束されていたのに，彼女は
　　あまりにも早くこの世から解放された。
夢のように生を送っただけで
　　死んでしまった。[32]

これに対して『周年記念の歌』には吹奏楽を聞いた時のような感動がある。しかし，ダンに悲嘆にくれた響きを期待するのは不当であろう。既に見てきたようにこの詩は新しいパトロンに自分を売る機会を与えてくれたと同時に心の休息となるような楽章の終わり近くに挿入される華麗なソロの讃歌を書く機会を与えてくれたのだからエリザベスの死はダンにとってまたとない幸運であったからだ。

また，エリザベスが死んだ後のこの世の卑しむべき状態に関する興味深い説明をこの詩に入れ込むことができたのである。恐らくこのアイデアは，ドルアリー夫人の親友ホーステッドの牧師ジョジフ・ホールから得たのであろう。彼は大学でこの世は崩壊しかかっているという考えを「巧みに主張すること」[33] で知られていた。ホールはダンのこの詩の序文を書き，印刷段階でも目を通しているのでダンがホールの大好きな説をこの詩に入れたと考えるのは妥当な見方である。いずれにせよ，このテーマはダン自身の意向に沿ったものであった。彼は世の遇し方に苦々しい思いを抱いていたのでこの世とその住人への大掛かりな非難のみならず，理想的な輝く世界を創って欲求不満を解消することができたことであろう。「熱病」同様『周年記念の歌』では両世界に属することができたのである。

ダンがエリザベス・ドルアリーについて書いた完全なものへの讃歌はダンの詩中野望の芸術としては最も元気づけられた時のものである。（ロバート・ドルアリーへの感謝の気持ちを表しているのだから，もちろん，より平凡で面白みの少ないという意味でも野望の芸術と言える。）テンポの

ゆっくりとした聖なる詩であるが，これらの詩に見られる大望を抱く性格と初期の時代のより世俗的な主題とがいかに符合するかを示すにはエレジー「床入り」を取り上げるのがいいだろう。これは七つのエレジーの一つで（他は「腕輪」「嫉妬」「つづり換え」「心がわり」「香水」「姿絵」である），手稿写本にある証拠により1599年以前のものとすることができる。[34] このエレジーは手稿写本として唯一残っている２番目のエレジー（１番目は「腕輪」）であることはほぼ明らかで，ダンがリンカンーズ・インの学生であった20代初期のものと推測される。印刷するにはあまりにみだらと思われて，ダンの息子が集めて1633年に出版したダン詩集の初版では削られていた。長い詩ではあるが退屈な詩ではない。

さあ，奥様，早く。精が余ってベッドに休んではいられない
ひと汗かくまでは，待つ苦しみに冷や汗をかくばかり。
敵と味方がにらみ合っていると，立ったままで
戦に入らない内に疲れてしまうものだ。
その帯を取って。帯は天の帯のように輝いているが，
その下にはもっと美しい世界があるはずだ。
きらめくその胸飾りを取って。せんさく好きな
連中にはその下が見られないように身につけておけばよい。
さあ，その紐を解いて。君の時計が優しい音を立てて
もう寝る時間ですよと告げてくれているではないか。
さあ，その幸福者のコルセットをはずして。羨ましい限り。
いつもくっついて，立っていることができるのだから。
ガウンが滑り落ちてあらわになるその美しきもの
山影が引いて，花咲く草原が姿を現すようだ。
さあ，その金細工の髪飾りを取って，見せて欲しい
君の髪を，君の生得の金髪の王冠を。
さあ，その靴も脱いで。素足のままで，安心して，
愛の聖殿のこの柔らかなベッドへ。
君が着ている純白の衣をまとって天使たちが人前に
姿を現したものだ。だが，君という天使は，
マホメットの楽園のような天国を恵んでくれる。
たとえ悪魔が白衣を着て現れようとも，天使たちとの
区別はわけもないことだ。悪魔はわれわれの
髪を逆立てさせるが，天使は肉を立たせてくれる。
　ぼくのまさぐる手に特許を与えて行かせてくれ，
前でも，後ろでも，間でも，上でも，下でも。
ああ，ぼくのアメリカ，ぼくの新大陸，

ぼくの王国，男一人が君臨する時最も安全なところ。
宝石を埋蔵したぼくの鉱脈，ぼくの帝国，
君を発見してぼくは本当に幸せ者だ。
君とこんな契約をすることは自由を得ることだ。
だから，ぼくの手があるここに進んでぼくの印を押そう。
　全裸，すべての喜びはここにある。
魂が肉体を捨てなければならないように，肉体も衣を脱いでこそ
喜びを満喫できる。あなた方女性のつける宝石は
アタランタの金のリンゴのように，男の眼をひくためのもの。
愚かな男たちは宝石に眼を輝かすけれど，
彼らの俗物心は女ではなく，女の付属品を欲しがる。
素人むけのさし絵やはでな色の表紙
着飾った女はせいぜいそんなものでしかない。
女体こそ秘帖，それを開くのは
女たちに義認されて，特別な恩寵を与えられたわれわれのみである。
だから，ぼくも知っていいはず，
思いきって，産婆に見せたように，ありのままの姿を。
すべて，そう，その白いリネンも脱ぐのだ。
今さらざんげもないだろうし，ましてや純潔というわけでもない。
　君に教えるためにぼくから先に裸になろう
こうなったからには，男の肉体以外に君の身体を隠すものはない。[35]

従順な女性の犠牲者に脱ぐように命令し，挑むように自らの屹立したものに気をひこうとする（「立ったまま」という語がダンのしゃれの妙味）この独裁者の恋人は，もちろんポルノという暗部の世界の住人であるが，恥ずかしさや社会的な状況によって女性との関係がうまくいかない男性にとって空想的な役割を果たすことができるという意味ではそのような人々にとって魅力的ではある。しかし，こういった一般的な解釈以上に注目すべき特にダン的な特徴がこの詩にはある。

セックスはひどく金のかかる趣味を締め出すのである。女性の身につけているものの豪華さが強調されている。彼女は「輝く」帯をつけ，胸飾りは宝石で「きらめい」ている。寝る時間を知らせる「優しい音」は音の鳴る時計で，16世紀には高価な飾り物で，宮廷の貴婦人やお金持ちの妻しか所有を望めないものであった。（「箱そのものにも宝石がついている」時計があることを，おそらく回想としてであろうが，後年の説教でダンが述べることになる）。[36]「金細工の髪飾り」は特に暗示的である。「髪飾り」は金か銀の冠に関して使われる語で上流婦人の精巧な頭飾りの一つであるが，元来は貴族の男女がかぶる小ぶりの王冠のことである。一連の彼女の動きを通してダンが描いたセックスシンボルとしてのこの女性は貴族階級の人であろう。あるいはそう思わせるものがある。既に「トイックナム庭園」で貴族との愛の交歓が描かれている。こういったことを考慮するとダンのた

くらみは性的のみならず社会的・経済的野望を満たすことにある。ダンが想像した豪華なアクセサリーはストリップショーそのものと同様に重要なもののように思われる。

これらのいずれよりも重要なのは支配を強調することであるが，これはダンと女性との関係だけに限定されるものではない。他の男性に対する優位性も描かれているからである。女性の持ち物の豪華さを宣伝しているが，その一方で豪華なものに心を奪われる人をけなしている。女性は宝石を身につけて実業家（「愚かな男たち」）やさもしい輩の心を引くとダンは言う。彼自身はもっと品位のある少数派に属している。こんな風に挑発しながらうまく自分が気品があると同時にふしだらに思われることに成功している。同様に，宗教をおろそかにするふりをしながら，宗教的な言葉を操ってみせる。魂は「すべての喜び」を経験するためには肉体を離れなければならないという教義や人類の救済を可能にするのはキリストの義認された恩寵（つまり，人間に帰与されたキリストの義）というプロテスタントの信仰を暗示しているのである。このような細かい宗教上の考え方を詩の中に入れることによって，既に見たように，ダンの背教をうながすことになった宗教を守りながらも嘲笑するという彼の特徴が表れている。

こういった戦術を用いることによってこのエレジーは富の崇拝と同様に神を恐れる心を克服しようとする姿勢を確立していくのである。ダンは富の崇拝者と交際するには洗練され過ぎており，神に恐れを抱くような迷信を信じるほど愚かではない。軽蔑の対象は魅惑された女性の犠牲者だけではなく，人間全般という大きな区分にまで広げられている。さらに，その語り口と文体によって心を奪われていると思われていた主題を越えてしまう。丁度「熱病」で熱病の女性がダンの探求心に合うような違う主題に取って替わる傾向があるように，このエレジーも進むにつれてますます高みへと引上げられて行き，衣服を脱ぎ始める女性への目下の関心がなくなり停止してしまう。この詩のクライマックスは裸の女性への一般的な称賛であって，我々が期待するようなこの女性の財産目録ではない。実際，エレジーという題をつけられて少々驚くが肉欲に関しても特別なことは書かれていない。始めから終わりまで髪以外は描かれてはいない。尻も足指のつめはおろか胸や太腿も描かれてはいない。多くのエリザベス時代のポルノ（例えばトマス・ナッシュの愉快な「バランタインの選んだもの」[37] を見るとよい）では欠かすことのできなかった女性の身体をよだれを流さんばかりに眺めるようなところはない。エリザベス時代のポルノに比べてそのポルノ性は希薄で抽象的だ。女性が脱ぐ服を品定めするような眼差しが詳しく描かれているが，女性そのものはほとんど見ていないように思われる。

視覚だけによって描かれていないということは山影が引いて「花咲く草原」が姿を表すという優美で含蓄のあるイメージの使い方で明らかである。女性がなかなか服を脱がない様子が欲望をそそるように「少しずつ動く」という動詞で刺激的にとらえられている。しかし，立ったまま女性がガウンを脱ぐと視覚的には「花咲く草原」に似たものではまったくなく白いスリップが――数行後で「白衣」といっているが――現れる。「花咲く草原」によって生み出される色彩豊かな印象が白という素朴な色に変えられる。事実，ここのイメージは視覚的というよりは精神的なのである。興奮するような喜び，啓示の感覚，眼もくらむような輝きは突然雲の晴れた田舎を見た経験と服を脱いだ女性を見た経験とが結び合わされているのである。女性がまだスリップを着ているのかどうかわか

らないのだから寝室へ進む段階ではないことを示している。終わりから4行前で脱ぐように言っている「白いリネン」はこのスリップのことであろうが，彼女が恥ずかしさのために身を隠しているベッドのシーツでしかないということもありうる。「ざんげ」のしゃれはシーツ〔悔悟者は白い服（シーツ）を着ることが必要なので〕を連想させるが，もし女性がこの行あたりでスリップを脱いでいたとしたらダンは「ざんげ」を省いていた。

最後にこのエレジーの優れたところ（『周年記念の歌』を含めたダンの多くの詩もそうだが，再び「熱病」を思い出させる）は一般的に重要だと思われていたもの――この場合は大陸（「ああ，ぼくのアメリカ，ぼくの新大陸」）だが――へと女性をふくらませようとするところにある。こういった言葉を使うことによってダンは公的世界を私的世界に閉じ込めることができるのであり，性愛のみならず世俗的な成功の頂点に達することができるのである。恋人ではなく支配者なのである。「王国」「帝国」はベッドでは意のままである。

ダンの国王であるという主張は「日の出」の中心部に明確に表されている。

おせっかいで手に負えない，おいぼれ阿呆の太陽よ，
　　おまえはどうしてこんな風に
窓を通して，カーテンを通してのぞき込むのか。
恋の季節もおまえの動きに従えというのか。
　　生意気に教師面したおまえなんか
　　遅刻した生徒や不きげんな奉公人でも叱りに行け。
　宮廷の猟犬係に王様がお出ましだと告げよ。
　田舎のありを取り入れの仕事に狩り出せ。
愛はいつだって季節も知らないし，天気も知らない，
時間も，日も，月も，そんなものは時の端切れでしかない。

　　おまえの光は神聖だ，強力だと，
　　どうしてそんなにうぬぼれるのか。
そんなものまばたき一つで消してしまえる。
そうしないのは彼女の姿を少しでも見失いたくないからだ。
　　彼女の眼がおまえを盲目にしなければ，
　　よく見よ，香料と金銀宝石の二つのインドが
　元のところにあるか，それともぼくの横にあるのか，
　明日ゆっくりと報告せよ。
昨日おまえが会った王様たちに尋ねてみよ，
すべての王侯はこのベッドの中と答えるだろう。

彼女はすべての国家，ぼくはすべての王
　　その他のものは存在しない。
王様たちは，われわれの役を演じているだけ。
われわれに比べれば，すべての名誉はまがいもの，財産はにせもの。
　　全世界の縮図がここにあるのだから
　　おまえの幸福なんかぼくたちの半分だ。
老いたおまえは休め。おまえの務めは世界を
暖めることだから，ぼくたちを暖めればよい。
ぼくたちを照らせば，世界を照らすことになる。
このベッドこそがおまえの中心，この壁こそがおまえの軌道だ。[38]

「おせっかいでおいぼれ阿呆」という句は「床入り」の「せんさく好きな連中」を思い出させる。このエレジーの女性がアメリカになり，この詩では二つのインドになっている。エレジーの軽蔑と尊大さがこの詩にもある。しかし，この詩の注釈に当たって研究者達は，表面上の王にふさわしい表現の中に亀裂のように広がる不安に強い関心を抱いている。彼と女性がすべてを消してしまうような高位の存在だということを強調しているが，ダンは世間の人々がせっせと仕事をしていることをイライラしながら意識しているのである。実際の宮廷や王のしていることが意識の底にあり，これに対抗するかのように詩中で私的に王の権威を喚起させているのである。現実にはダンがいかに「忙しく」ありたいと願っていたか，窓に巣を張るクモのように無為であることにいかに無力感を覚えていたか，また，世の中や宮廷に受け入れられることがいかに大切なことだと思っていたかということが思い出される。この詩の最初の言葉には軽蔑と共に嫉妬や怒りが込められている。

ダンが自慢して使う時の言葉は，すべてそうだが，不安の表現であり，そのためにかえって詩が人間味を帯びることになるのである。彼が王の振りをするのは結局個人的に満たされていないことを自認しているからである。二人の普通の個人的愛が最高度の意味を持つなんてあつかまし過ぎて口にも出せないものであるが，それをはっきり言おうとすればあえて現実の王との比較を持ち出さなければならない。そのためには王を最高位とするという伝統的な価値観を受け入れなければならない。ダンはこれをひっくり返そうと思っていたようだ。恋人が王と呼ばれることだけで最高位につけるものであるとしても，王はやはり最高位にあるものだということを認めることになる。個人的世界が公の世界を真似ることによってのみ価値ある世界となるのである。

ダンは聖職に就いた時再び詩の中でこの職に就くことによって王に，並外れた王になれたという振りをする必要性を感じていた。「聖職者となったティルマン氏へ」という詩で新たに聖職に就いた人にその人の職つまりダンの職がいかにすばらしいものかを述べ，次のように言う。

神と運命の大使を務める程の高貴な仕事が
他にありうるだろうか。
生命の扉を開き，王が爵位を与える以上に

多くの人に天国を恵み・・・・？[39]

これを読むと我々はダンが神と運命の大使ではなく実際にはヴェニス大使になりたかったのだということを思い出す。この行に見られる自己拡大は慰めの表現形式の一つである。自分やティルマン氏を注目させることでダンの思いつく最大のものは自分たちを王や貴族より上に置くことである。彼の人生の大半が王の与える爵位を求めることであったことを知らなくても，ダンがいかに王というものに関心を持っていたかがよくわかる。

「ティルマン氏へ」に見られるさまざまな奨励と比べて「日の出」では王に就こうという試みは非難されているようだし，それ以上に揺れている。詩が進むにつれて太陽にしてもらいたいことに関して気が変わって行くのが目立つ。最初は去れと命令するのだが最後で太陽に自分と女性を暖めて欲しいという。彼がそういうまで暖めてもらう必要があるとは思ってもみなかったことだが，このアイディアはすばらしい。ダンの太陽に向かって言う言葉が太陽を退ける表現（「行け」）から太陽を招く表現（「ぼくたちを暖めればよい」）へと変化するのは太陽への態度の変化によるものである。冒頭の不機嫌な様子が和らいだ調子（「老いたおまえは休め」）に変わるのは話者が結局のところ恋人と二人だけにされたくないからだ。二人だけでは十分な優越感を味わえないからなのである。太陽には二人だけに輝いて欲しいのだ。こういった態度の変化のお陰でこの詩が無意味な虚勢に堕するのを防いでいるのである。生あるものは移り変わって行くものである。

この不安・心配はもう一つのダンの偉大な詩「一周年記念」に共通するものである。しかし，「おはよう」の恋人達が寒いところに置いていかれることを心配しているのに対して「一周年記念」の恋人達は近づく暗闇と戦う。

王たちも，そのちょう臣たちも，
名誉・美・才知に輝く人たちも，
過ぎ行く時をつくる太陽自身も，
今では，一年歳を取ってしまっている
君とぼくが始めて会ったときから。
他のすべてのものは滅亡に向かうが
ぼくたちの愛だけは衰えない。
ぼくたちの愛には明日もなく，昨日もない。
時が巡っても，愛が離れることはなく，
正に，最初の，最後の，永遠の一日を保っている。

君とぼくの亡骸には二つの墓石，
だが，一つの墓なら死は分かれではない。
悲しいかな，他の王と同じように，
（お互いに，二人にとって，立派に王様なのだから）

死ぬときには誠の誓いや，甘苦い涙で養った
これら目や耳と別れなければならない。
　　しかし，愛だけを宿す二人の魂は
（他の心はみな同居人）
身体が墓に入り，魂が肉体から出るとき，
愛が天で強められることを証明することであろう。

　　そうなれば，至福のときが得られる。
　　しかし，それは他の人たちも同じこと。
この地上では，ぼくたちは王様
他にこのような王様や臣下はいない。
ぼくらほど安全な者はいない。
二人を除いてぼくらを裏切る者はいない。
　　虚か実か心配するのはよそう。
気高く愛し合って生き，再び，年に年を加え，
さらに年を加えて，還暦を祝おう。
今年は二人の治世の二年目だ。[40)]

この詩の冒頭三行は王様と栄光を太陽に重ね合わせてその威光へのファンファーレのようである。しかし，実は挽歌なのである。華麗なまばゆい光に影がさし，その衰え行く輝きとはかかわることなく急に詩人の個人的なことが主張される。つまり，最初の集中的に描かれていた帝国や太陽系の破壊よりは個人的な主張の方が中心となるのである。

この詩の華やかな始まりに似つかわしくない不安は「日の出」のそれより大きいが，無遠慮な態度やからかいは「日の出」に比べて押さえられている。第一連が終わると自信がなくなり，第二連が始まるとすぐさらに心配そうな困った声が支配的になる。自分も恋人も幸せなふりをするようにと説得しようとする（「気高く愛し合い」）が，実は自己欺瞞であることを認めている。そんなことを考えるのは「よそう」とどれだけ決意したところで，虚の不安と同様「実」も本当なのか不安なのである。最終行の還暦の恋人達のイメージはどんなに考えても慰めにはならない。

王になるという主張も「日の出」ほどには自信に満ちてはいない。「彼女はすべての国家，ぼくはすべての王」という主張を強く推し進めるのではなく，この主張を一種の特別な願いとして詩中にこっそりと入れて死を恐れる恋人を慰めようとする。結局，恋人に信じさせようとしているように二人は「お互いに，二人にとって，立派に王様」なのだろうか。王に適任だということを表す「立派に」という言葉は見せかけでしかない。二人は本物の王ではないからだ。また，第三連の「他にこのような王様はいない」という一層強い口調も「ぼくらほど安全な者はいない」という宣言を支える必要があるほどその効果は弱いのである。

しかし，自信が次第になくなっているとはいえ至高のものへの願望が減ったということではない。

まったくその逆である。死の思いにとらわれることが心配なのは死が二人を引き離すからでも，死が二人の愛を壊すからでもなく，また，二人の幸福を減らすからでもないことに気づかなければならない。このようなことはいずれも起こらないとダンは自分に言い聞かせているのである。死によって二人の至高の状態が終わるのが心配なのである。死は絶対の幸福（「至福」）であるが，その点では「他の人たち」も幸福なのである。それでは我慢ができない。ダンが強く求めているのは幸福というよりは優位であり，優位性を獲得するために詩の中から死後の生命を抽出し，王としての優位性（「この地上では，ぼくたちは王様」）に戻るのである。二人の治世が一時的でしかないことはわかっている。最終行でわかるように時間の導火線にはもう火がついている。にもかかわらず，彼はこの治世にしがみついている。これが詩の大きな方向転換を誘う。というのは冒頭部で明日も今日もない肉体を伴わない時の支配から解き放たれた愛をダンが賞賛していたが，今では年月で計られる二人の君主国になっているからである。

もちろん死後も二人が王であり続けたいとだけ思っていたのであればダンはもっと簡単な詩を書くことができたであろう。そうすれば天上の幸福と王としての最高位を選ぶ必要はなかったであろう。これは何百年にもわたって他の作家も，本気であれ，想像であれ，求めてきたものである。シェークスピアのアントニーは，クレオパトラと共に王としての死後の生命を次のように見ている。

> 魂が花の床にねるという天国に行って，二人で手に手を取って，
> 陽気にふるまって，幽霊たちに目を見張らせてやろう。
> ダイドーとイーニアスにつきまとう幽霊たちも
> 我々二人の周囲によってくるであろう。[41]

D.H.ロレンスの貴族達もまたその卓越した生命力のおかげで黄泉の国で成功すると思える。『てんとう虫』の中でダイアニース伯爵はダフニに「死んだら黄泉の国の王位につく。君はその隣にいることになる。」[42] ことを確信させる。ダンは時として天国には地位や階級があるかもしれないと信じそうになることがあった。「天国の聖人達の栄光にも程度の差があり，これを否定する人はまれである」と1626年の説教で語っている。「天は王国であり，キリストが王であり，国家ではなく君主国であることは衆目の一致するところである。」[43] かならずしもこれを信じていたわけではないようだ。わずか三年後他の説教で「皆同じように偉くなり・・・右手に至りやがて等しく王になる。」[44] と違う考えを述べているからだ。このような平等主義的考えを持っていても「一周年記念」では恋人二人を天国の王と表している。というのは二人が祝福される者となろうとはっきり述べているからである。しかし，実際には違う。至高のみならず自慢気に語る王位のはかなさも暴露するように仕組んでいるのである。ダンは恋の王と王にならないままの死とを対抗させることによって詩中に表された確信を疑念で弱め，不安でその望みを薄めるのである。

これら二つの詩で自分と恋人の君主振りを喝采する声は，さまざまな疑念から弱くはなっているが，間違いなくある。自分が王であると思うととても興奮するのである。自由主義的な見方をする

読者にとってはこの考え方はダンの欠点と見えるかもしれない。こういう読者はダンが愛と王を同一化することによって政治力と所有権を結びつけることに反対するであろう。恋人は世界（「すべての国家」）となるが，しかし，恋人は所有され支配された，実際には強奪された，都合よく利用された世界である。彼女は「香料と金銀宝石の二つのインド」である。このような読者は当然のことながらダンは強大なものにこびへつらっているだけで，王になりたいという強い願望を単なる日和見主義や飽くなき欲望でしかないと片付けるであろう。しかし，ダンの心情を正確に理解するためには宮廷や宮廷を占める高位高官に対する深い尊敬の念が精神的・想像的活動に深く根差しているので一種の宗教的信念となっていることを理解する必要がある。もし，ルネッサンスを宮廷の栄光と地上の神としての王のそれが頂点を極めていた時代と考えればダンもルネッサンスの人間に過ぎなかったのである。説教の中からダンが聖なるものと，もっと厳しい宗教的伝統の中で育てられた人にとっては誰でもためらうようなこの世の荘厳なるものとを結び付けている証拠を集めることができる。「王は神なので，良く統治された宮廷は神の国の模写であり，地上に表れた天である。」と断言している。さらに，「この世の王は天の王の美しい輝かしい似せ姿である。王はあの太陽の光であり，たいまつの炎である。神のように見える神なのである。」つまりキリストの「我々の魂を救って下さるはずの叡智」が「まばゆいばかりにはっきりと見つけられる」のは王の宮廷の中だと言うのである。聖書にある聖霊によって磨かれた言葉が王は「よき宮廷人」だということを示しているのである。[45]

もちろん，このようなダンの意見は聖なる権利を受けて統治しているのだというジェームズⅠ世の主張とぴったり合うものである。王の聖なる輝きはすぐさま服従と庶民の静かなささやきをうながすものである。太陽のように王は神のまばゆいばかりの顔を持つ。「太陽を通してわれわれを見下ろす神のいかに輝かしいことか。神の鏡のいかに輝かしいことか。王を通してわれわれを見る時の神のいかに輝かしいことか。」[46] 王はただ民の同意によってのみ統治するというのは神の権威を汚すことであるとダンは警告を発する。私人が王を非難するのはいかに正当化されたものであれ不敬だからである。教会と国家の権利の乱用を，明かに乱用であっても，批判する権利は我々にはない。[47] 批判すれば魂は危険なことになる。実際に役人を悪く思ってもその思いにとらわれるな。「国家の長が権力を持つことは間違っていると思うことは権力の源である父にそむく罪を犯すことになる。」[48]

ダンは決して聖職者の服従義務を免除することはない。国家の長による個々人の精神生活への干渉は，非国教徒の良心に従えばいつでも破門に値いすることでミルトンが正義の怒りを覚えたものであるが，ダンにとっては全くふさわしいことのようであった。彼は教会人としてあらゆる宗派の分離派教徒・国教離脱者を嫌い，そのために彼等を戻す機会を失ったが，彼等はキリスト教信仰者の栄光ある統一を破ったので法によって壊滅されるべきであると言う。また，神はわれわれの宗教を「国家の長の手に」[49] 委ねたのだということを会衆に気づかせるのである。懲罰法により洗礼を受けた教会にとどまらせたり，教会の儀式を行わせるのは正しいことである[50]のでセント・ポール大聖堂の司祭長の時忠告されてもひざまずくことを拒否した会衆をニューゲートに拘留させた。[51] 教会は個々の信者同様王の前では謙虚になるべきだとも主張する。旧約聖書の預言者のように教会

に仕える者があえて良心に従い王の前で大胆なことを言うのは「誤った，筋の通らない，危険な」[52] 言動であると言う。

高貴な宮廷に対する尊敬の念は王に対する服従心と同様ダンのキリスト教崇拝心に根差している。宮廷人達が着ている華やかでぜいたくな服は許されるだけではなく宗教的しきたりにかなうという側面もあるのだ。「神は聖書の中で自らを輝かせると言っておられ，」神は「天の宮廷で宗教の奉仕者として立派な服，絹や柔らかな服を着ておられる」[53] と指摘している。従って，宮廷人達は実際に高価な服で身を包み神の栄光が高まるようにしている。富，名誉，高位高官及び華麗な生活様式を求めることも，ダンの評価によると，身分の高いキリスト教徒と見られることになるのである。聖霊は豊かなものの比喩によって神と天国をほのめかし，永遠の生命は聖書の中で富裕を表す言葉で描かれているので，永遠の生命を確かなものとするためにはこの世で裕福であることが必要なのだ。「親愛なる皆様，救済そのものが栄光や喜びという言葉でわれわれに示されていることが多いのですから，栄光を得ようとすることが，例えこの世の仮の生ではあれ，浅ましい人生とは考えられません。この世で高位高官に昇ること，豊かになること，尊敬されることすべてを理解し難い，卑しい，関心を持ってはいけないこととして捨て去るべきものとは考えられません。」[54] と述べ，富を求めることは「真の天の叡智」[55] に完全に一致すると強調する。ダンの考えるキリスト教はキリストのそれとは似ていないという人に対してはダンは答えを用意している。「すべてのキリスト教徒はキリストではない」と見る。キリストが税取り立人や罪人と交わったのは確かだが，もしわれわれがそうすれば彼等の悪風に染まるとダンは力説する。キリストを真似るのは法外なことだと会衆に注意を促す。「というのはいつの場合も度を越えるのはよくないからである。」[56]

ダンの説教壇から流れる王や宮廷人へのへつらいは，神に身を捧げた立身出世主義の男の戦略だと皮肉な解釈もできようが，説明としては単純に過ぎるであろう。既に見たように一般の人を対象にして書かれたのではないダンの詩には王位というものにすっかり魅了されているダンと王に異議を申し立てるダンとがいる。心の奥底では王への思いが輝いていたのである。自分が王であるという想いは，はるか先の夢想ではあるが，あったのである。愛によって心が高められ想像をたくましくする時愛は王のメタファーとなるのである。「恍惚」の中で女性に「純粋な恋人達の魂」は肉体を離れて何もできなくなった状態にとどまってはならないと言うのである。

降下すべきだ
　感覚でとらえて理解できる
愛情や行為に。
　でなければ大王も牢獄の中。[57]

今日では国家の長が投獄されたといってもたいして恐怖は感じない。しかし，神が投獄されること太陽が捕えらえることはダンにとっては明らかにこの世ではありえない途方もない奇怪なことなのである。美しい男の子に弱く，とても品行方正とはいえない，好色で，愚かなジェームズＩ世を神や太陽とする考えを持つに至るにはダンが想像力によって現実のジェームズＩ世から離れるという

思いきった努力を必要としたに違いない。とはいえ，極端な言い方をすれば理想とは全てそういった努力を必要とするものなのである。絶対論者は誰でも先ず自分をだます決心をすることが必要である。ジェームズに絶対的な忠誠を尽くすには想像力を駆使する必要があった。想像力という戦略はダンの強い精神力から生まれたものである。「熱病」の女性を世界霊に変えたり，エリザベス・ドルアリーを聖なる原理に，あるいは，自分の恋人をすべての国家すべての王に変えてしまうダンの性向をまっとうするかのように説教の中に輝かしい全能の王を創り出すのである。絶対的なものへの衝動にずっと駆り立てられていたのである。

前に触れたようにこの点では特にミルトンとは対照的である。ミルトンは常に現実を構成するものを対立的要素に分けようとした。『快活な人』には『沈思の人』で答え，コーマスと淑女とが対比され，サタンと神は戦う。同様にダンもミルトンほどではないにしても，自分の内にある分裂を意識していて，分裂したものを統合し，乗り越えるような統一体を熱望していた。しかし，両詩人はその基本的性向から宗教的・政治的見解が著しく違う。ダンは違う要素のものを一つの超越的統合体として結びつけようとする三位一体の教えに夢中になって讃美するが，ミルトンはそれを拒否して神と子と聖霊は本質的に別個のものだと主張した。[58] ミルトンは分離を擁護し，ダンは詩中で魂の融合を，説教では結婚による神秘的な結合を強調した。ミルトンはキリスト教会を崩壊させた非国教派や分離派を『アレオパジティカ』で健全なる不一致のしるしとして弁護し，同じ理由でさまざまな議論を抑圧しようとするような為政者の検閲には反対であった。しかし，ダンは既に見たように非国教主義者を嫌い検閲を支持した。ジェームズⅠ世が1622年に『説教者指南』を出し論争の的になっている宗教上及び政治上の問題を公に取り上げることを禁じた時ダンはセント・ポール・クロスでの説教でこれを正当化する道を選んだ。ジェームズは非常に喜び早速印刷させた。[59] 当然のことながら王政に関してはミルトンとダンは正反対であった。チャールズⅠ世死刑執行を擁護する文を公にしたミルトンは王というものは国民の同意によって治め臣下は不当な君主にはその責任を問う権利を持つと述べた。絶対主義者のダンは太陽が雲を追い散らすように反対する者を追い払う神のような王のイメージに駆り立てられていたのである。

ダンにとってこの王権論の魅力はそのさん然たる輝きばかりではなく一人の人間に授けられた無限の力にもあった。ダンは権力の行使に魅せられており，それが彼の芸術の決定要因となっているのである。病的なほどの尊大さが「床入り」のような詩に表されている。比較的叙情的で讃美的な初期の恋愛詩でも支配力を強めるところが見られる。例えばエレジー「彼の恋人に」を例としてあげることができよう。外国にでかけようとしているダンが小姓に扮してついて行きたいという女性にやめるように説き勧め，家にいて二人の愛を秘めておくようにと請う。

ぼくがいなくなったら，ぼくのために幸福な夢を見てくれ。
今まで隠し通したぼくたちの愛を顔色に出さないでくれ。
ぼくをほめても，けなしても，人前で愛の力を讃えても，
呪ってもいけない。真夜中にベッドの中で，
大声を出して乳母を驚かしてはいけない。

あゝ乳母よ，私の恋人が殺された。彼が白いアルプスを
独り越えるのが見えた。襲われ，戦い，捕まり，
刺され，血を流し，倒れて，死ぬのが見えた。[60]

夢を見ておびえている少女の姿を浮き上がらせるように思われる不気味な光は我々の心をとらえるだけではなく，劇的な効果を発揮する想像力が生み出したものである。ダンは他人の潜在意識の中に入り込むのである。「床入り」では女性の心は描かれず，描かれているのは肉体と脱ぐ服のみである。しかし，これよりももっと思いやりのある「彼の恋人に」でも同じように命令口調のダンがしっかりと明示され，この詩全体にわたって指示がなされている。ダンは偶発的な出来事を見通し，危険を予測し，少女の取るべき行動を選択し，それ以外の行動を禁止する。乳母がいることからそう思われるのだが，彼に比べ彼女はまだ子供である。また，詩中では彼女が彼への愛に狂い，そのために彼が彼女の夢を実現してやっているのだが，駆落ちというような無茶なことはしないようにとさとさなければならないことが暗示されている。この詩では「床入り」のような懲罰的詩ではないが，少女の思いや行動を制する力がしっかりと確立されている。ダンの詩が発展していく根源には支配力がある。

支配力はダンの詩においてはその本質となっている。この支配力は詩人が取る命令的な態度や容赦ない議論口調，想像力で生み出された感覚界のさまざまなものを強引に結びつけることによって伝えられている。読者は詩の背後にある強制力を感じ，それに触発されてとても手に負えないと思われるようなものも扱いやすくなる。コーリッジはダンに関する次のような詩行でこの誰もが抱く反応について述べている。

詩的霊感がひとこぶらくだの早足のように浮かぶダンとともに
鉄の火かき棒をよって真の愛の結び目にしよう。
韻はびっこで頑強，想像力は迷宮と道しるべ，
機知は溶鉱炉とその吹子の風，意味はひしめきひねられる。[61]

ここではダンは容赦のない強制的な一種の産業機械装置として描かれている。

支配力あるいはダンの言う「男性的な説得力」[62] は統語法，韻律にも内在する。詩には言葉が玉石のようにぎっしり詰められ，その言葉から意味が浮かび上がってくる。倒置と挿入が詩の流れを破り，その結果流れは難航することになる。このことは既に引用した「一周年記念」に容易に見られる。

しかし，愛だけしか住まない二人の魂は
（他の思いはすべて居候）その時示すだろう
永遠の愛を，または愛が天国で増大することを・・・

挿入（第二行）と修正（第三行）によってこの一節は，熱のこもった議論には口をはさみ難いような，きゅうくつな感じが与えられる。詩型が間違っているのではと思わせるように作られている。ダンは自ら選んだ韻律に乗って詩を進めていくのではなく韻律と格闘している。この詩の冒頭に何気なく優雅なものが導入されているが，全体の障害の多い計画の背後に優雅なものへの決意がひそんでいることを，韻律以上に，強く確信させる。

いろいろな命令や質問もまた詩の流れを中断させており，それによって我々の注意を引き主張を受け入れさせるのである。『歌とソネット』は大半が命令形，疑問詞，至上のもので始まっているが，何故なのか論証される必要がある。これらに関してはたびたび議論されており，立派な考察もなされている。大半の詩が普通の詩に比べて激しく，詩中の各部分の関連がぎこちなく，ある人が計算したのだが，動詞は英詩の平均より10行につきおおよそ二つ多く，接続詞に至っては6～12多い。[63] これは叙景詩や物語詩のように暗示的ではないことを示している。ダンの詩は，ひとり芝居に似ており，その中でおだてたり，要求したり，宣言したりするダンの姿が大きく前景化され，言葉の流れが指し示す誰かわからない人物の肩越しや腕の間から彼の姿がちらりと見えるだけである。

作家としてのダンの空間の捉え方も支配力が強いという印象を与える。詩においても散文においても人間は風景の上にそびえ立つ。ダンには巨人の性向がある。彼の語りを聞いていると目下の状況がさまざまな場面の特徴と共に取るに足らないものへと縮んで行く。彼は大地を地図あるいは地球と見，天球が地球の周りを回っているのを眺めるのである。高所にいるダンは山脈や深い海を概観できる。『第一周年記念の歌』のテネリフェ山は

岩のように，・・・，空に浮かぶ月も，そこでは，
座礁した船のように，乗り上げて沈むと思われる。[64]

彼は同詩中で底の見えない一尋の暮れなずむ海をじっと見つめ，その間を運命を定められた生き物が刻一刻と沈んで行くところを想像している。

かくも深い海なので，今日打たれた鯨も，おそらく
明日になってもやっと旅の目的地の半分
半分までも沈まないうちに死んでしまう。

ダンは地表の水の動きを知って，「三重馬鹿」で言うように，

地下の細く曲がった水脈が
海水の苦い塩分をろかする。[65]

ことに気づく。ダンの語っている高い位置からは川は縮れた水路のように見える。この視点はテニ

ソンの「わし」を思い出させる。

けわしい岩をねじ曲がった両手でしっかりつかみ，
人跡まれな高所，太陽に真近く・・・
縮んだ海が彼の下に這う。[66]

テニソンのこの詩の要点はわしが例外的な高みにいることであるが，ダンは川を細い曲がりくねった水脈に縮小するのである。それによって当然のことながら広い視点が得られ，我々は知らない内に空中に舞い上がり，眼下に世界が広がることになるのである。

ダンの視野の広さは宇宙的である。ダンにとって空は見慣れた世界なのだ。その世界を宇宙形状誌学者の宇宙図のように分割して縦横に見ることができるのである。

・・・人は経線や緯線を作り，
それを使って網を編んで，それを大空に投げ，
星たちを自分のものにしたのだ。[67]

他の詩に見られるように太陽はエネルギーの源，世界を育むという聖なる力を持つものとは考えられていない。ダンにとって太陽は主として飛ばされるもの――軌道を持ち，その軌道を予定通り巡る地球の衛星である。ダンが太陽について話す時念頭にあったのは地球を巡る太陽の軌道である。太陽を頭上に輝くものとしてではなく，金魚鉢のような空間を泳ぐものとして見ている。太陽に対するこの優位な立場を楽しんでいるから太陽を自分と同じあるいは下のものとして「眠れ，眠れ，年老いた太陽よ」[68] と言えるのだ。太陽に命令し，まばたきをすれば消せるとおどすのである。『神学論争』ではエックス線の眼を持った宇宙飛行士のような人の視点から地球の隆起や窪みを横目で見下ろす。

丘は，その頭を流れ星の国の上に突き出して，片方の足を一つの国に置き，その影をもう一つの国に投げかけても，地球の顔のいぼでしかない。洞窟，洞穴，風穴，かくれた路，川筋は，・・・多くのしわやあばたの窪みでしかない。[69]

宇宙空間からは山をこぶとして見ることができるが，山影は国全体をおおうと見ることもできる。世界は縮小されるが，そのまま現実に存在し続ける。

こんな風に成層圏に足を置くとその効果は強烈である。そのために入れるものと省くものが影響を受け基本的な構想が作り直され，その結果普通の詩ならばこうなるであろうと指摘されるまで扱う主題としていかに風変わりかということに気付かない。これを良く示す詩は「金曜日，1613年，西に馬を走らせる」である。というのはこの詩の制作事情がかなりよくわかっているからである。1613年ダンはアーデンの森のポールズワスにあるヘンリー・グディアー卿のカントリーハウスに滞

在していた。ダンが訪問時にグディアーと二人で交互に書いた（グディアーの部分はイタリックにする）詩からポールズワスがどんな所かわかる。二人の名前のわからない婦人に寄せたもので彼女らを田舎のポールワスの春の喜びに喩える。

今や木々は残らず花をつけ始め，それぞれ
枝は芳しい香りを放ち，艶やかな色に光る。
人の心も同じように，結実のときを迎えるべきだ・・・・

花から甘い香りが立っていれば，われわれはあなた方の
甘い息吹が立ち昇っていると考えて，
あなた方の真の象徴として，花に敬意を抱く。

ここにナイティンゲールが来て歌えば，その歌声は
あなた方のものと思い，常春が来たと考えて，
刺すような秋の風の心配を忘れてしまう。

アンカー川の静かな水面にあなた方の穏やかさと
あなた方の純粋な心を，あの川のように
澄み切って，最初の純潔をそのまま持っているのを見る。[70]

この詩はポールズワスの持つ伝統的な強みが何であるか――花をつけた木々，花の香り，ナイティンゲール，アンカー川――を示している。グディアーは引用最後の節でこの汚されていない川を称賛している。ポールズワスに住んでいたエリザベス朝の詩人マイケル・ドレイトンはいくつかのソネットでアンカー川の美しさをほめたたえている。1613年のダンの訪問は4月2日で終わった。その後馬に乗って別の友人エドワード・ハーバート卿のいとこフィリップの所有するモントモゴメリー城へ行った。途中で「聖金曜日，1613年　西へ馬を走らせる」を書いた。手稿写本の一つに「聖金曜日，その日，西へ馬を走らせている時に作った」という付箋がついており，これは後にダンが書き写した時につけたダン自身の付箋のようだ。他の手稿写本からこの詩はダンが旅を終える前に完成しグディアーに見てもらうために送られたものだということがわかる。この写本には「ダン氏H.G.卿の元を去って；聖金曜日に，旅の途上H.G.卿にこの瞑想詩を送る」とある。従って，ワーズワスの『ティンタン・アビィ』のように詩人が実際に美しい場所を移動している途中に作られた詩である。

しかし，その他の点においても『ティンタン・アビィ』と大いに似ているであろう。モントモゴメリーはポールスワスの西方65マイル程のところにあり，そこへ馬を走らせながらダンはブリテン島でも最も有名な風景――ハウスマンの『シュロプシャの若者』に描かれた風景――の中を通ったのである。ウェンロック・ウエッジは，ハウスマンはこの森を通るのは大変なことと見ているが，

ダンの通った道の半ばあたりで南方に広がっている。しかし，ダンの詩を読むと馬で通ったこの辺りの風景に気がついていたにもかかわらず，月面を旅していたかのようである。心は惑星の中にあって，それら天体の不規則な運動を考えている。

人の魂を天体とすれば，その中にあって
それを動かす天使にあたるものは信仰である。
魂以外の天体も外の天体の運動の影響を受けると
本来の運動を失ってしまい，
毎日外の天体にせかされて，
一年でその固有の運動を終わらせることはまれ。
それと同じように，われわれの魂も遊びや仕事を
第一動因とするならば，それに振り回されている。
従って，今日私は西に向かって旅をしている，
心は東に向かいたいと願っているのに。
そこに行けば太陽が昇り，沈むのが見え，
沈むことによって永遠の昼が生まれるのが見られる。
この十字架の上にキリストが昇り，沈んだのでなければ，
罪が人間を永遠の闇に落とし入れたことであろう。
そんな光景を見ないのはむしろ嬉しいことだ
私にはあまりにも重大なことだ・・・
両極に指をのばして，同時にすべての天球を回転させた
あの手に穴があけられるのを見ることができるだろうか・・・
こういったものが，馬に乗っている私の眼の前にあるわけではないが，
しかし，私の心の中に刻まれているものである。
私の心はそれらのものを見ているからだ。あゝ，神よ，あなたは
十字架に吊るされて，私を見つめる。[71]

ウォリックシャーやシュロップシャーの川，鳥，木，それにそこの住人のことも，ダンの乗った馬のことも，消されている。彼が通ったこの辺りの地形も描かれてはいない。詩中の地形は超現実的である。視点は惑星のようにこの風景の中で唯一目立つ十字架のキリストから離れて行く。ダンは眼をそらし，キリストが吊るされて彼を見つめる。ダンとキリストの二人だけである。

ダンの詩では巨大な宇宙が扱われる。ダンの眼には海も隠されている。それは単なる地球上の海だけではなく――ダンは既に涙で流してしまったから――銀河系の未踏の世界にある海である。

最も高い天のさらにその向こうに，新しい天球を発見したり，
未知の国々について書いたりすることのできる人たちよ，

ぼくの眼に新しい海を注ぎ込んでほしい。そうすれば
ぼくは泣いて新しい世界を沈めることができる。[72]

ダンの愛に関していえば地震による動揺では描けないほど大きい。その動揺は宇宙の震えに似て宇宙の骨組みをねじるにもかかわらず，遠くに離れているのでその衝撃は地上での人間のささやきほどにもならない。

地球が揺れると被害と恐怖をもたらし
　何が起こったのか，その意味はと騒ぐ。
だが，天球の振動は，その規模においては
　はるかに大きいのに，何の害も与えない。[73]

彼が愛を与える女性には宇宙的力があり，彼女の引力は潮の干満を支配する。

　月の女神にまさるあなたよ，
海水を膨張させてあなたの天球で溺れさせないで・・・[74]

二人が泣くと天体が涙に飲み込まれるのである。二人の愛が弱まると自然は破壊されて天地創造以前の混沌の世界に戻る。

　　互いに
　流す涙が洪水を起こし，
全世界，すなわちわれわれ二人を溺死させ，
他のものに心を寄せて，二つの混沌界
となったことが度々あった。[75]

これらの地理学の知識が英国ルネッサンスが生み出した世界支配というダイナミックな特徴と結び合わされている。世界を支配しようという意思が最も早く表されているのがこれらの詩である。

恐らく説教以外ではそうであろう。というのは英国国教会に入って神を見つけ，神の代弁者としての地位に就いてやっと自らの支配欲を最終的に充分に満たすことができる表現法を見つけたからである。説教の中でもっともよく崇拝したものは何かといえば，それは美でも，人生でも，愛でもなく，支配力であった。彼の神は天の力の源，巡行していても燃え立っている。エネルギーの爆発である。神の眼は太陽より熱く，人間を溶かす。一息で国を吹き飛ばし，一触れで世界を破壊することができる。その声は恐ろしく大きい。「罪深いきまぐれ」を心に抱いて子を産む親を罰するために子供が殺される。背中や首を砕く。測り知れない，恐ろしくなるような方法で人間を殺す。彼の法は好戦的な法である。わずかなもので喉を詰まらせたり，一番近い木に吊るしたりすることも

できる。舞台とその役者，ベッドと恋人達をたちまち地獄に落とすことができる。20万のアッシリア人をセナケリブスの軍勢を使って一夜にして殺した。天から石を人間に投げつけたり，大勢の人達を盲目にして懲らしめたり，馬と火を吹く戦車で山を一杯にしたことで知られている。地震，疫病，「悪臭の流出」は彼の手中にある。彼は，簡単にいえば，聖なる，殺人を犯す，ひどく恐ろしい人であり，被造物である人間を苦しめるために選んだ道具に関しては不断の発明家である。「主が怒られれば，軍勢を呼び込むトランペットは必要ないし，蝿や蜂にしっと言ったり，ささやいたりするだけで，あなたを不快にさせたり，困惑させたりするような，また，あなたの魂の中心を溶解させたり，抽出したり，小さくしたり，破壊させたりするようなどんな小さなものも手に残らない。」[76]

ダンの説明によれば，神の愛と慈悲は二次的なもので，力こそが一次的なもので本質的なものである。神の他の属性を働かせるのは「力でなければならない。」「力こそがすべてのことを成すのである」とダンは説明する。神が天界に星をちりばめられたように「聖書には力としての神の名が陰喩，象徴として表されている。」[77]

さらに，読者にはもうおわかりのことだろうが，ダンが特に好んで強調するのは神の破壊力である。もちろん，彼の神は破壊の神であると同時に創造の神でもある。しかし，創造論――イデアとしての創造――にダンは魅惑されているのだが，後に見るようにその構想を具体化することはなかった。ダンの作品には，直ぐにミルトンの『失楽園』第七巻に見られるうっとりするような独創的な創造に関する説明と並べられるような一節はどこにもない。ダンが讃美するのは殺す人，粉砕する人としての神である。「この世で起こる悪事はすべて神の成せる業」だということを会衆に気づかせる。すべての悪疫，戦争，飢饉は神によるものである。聖書にある神の御名，シャダイは「剥奪，暴力，強奪」の意味だとダンは指摘する。「シャダイから神の名と力を思い浮かべるように，不名誉と恥辱，暴力と強奪，破壊と破滅，誤解と思い違い，悪魔とその試みという言葉が浮かぶ。」[78]

神の代理人の天使が破壊という贈り物をする時にはダンの想像するように感動に近いものを覚える。「天使は肉体や泡や水蒸気やため息のような実態をほとんど持っていないが，一触れで岩を砂よりも小さな原子に破壊する。従って，その砂はひき臼が作り出す粉よりずっと小さな粉になる。」[79] もちろん実際に天使がひき臼をすり砕いて粉にしたからといって，それを検証したくなるようなことではない。ダンの天使がただ力業を見せたからといって電話張を引き裂くのと同様無意味なことで，ただ巨人の力を持っているというだけのことに過ぎない。圧倒的な力を持っているが故に天使を崇拝することになるのである。

さらに，ダンは神の代理人として自分自身がこの大きな力を共有していると感じることができたのである。彼はただの説教壇に上った年老いた人間ではなかった。彼は地震であり，ライオンであり，滝であった。今や支配力を，これまでの詩に見られたように，しきりに持ちたいと考えていただけではなかった。また，最上権を持つという彼の考えはもろい虚構ではなかったのである。全能の主が彼に求めるように命じた聖なる真理だったのである。罪深い群集の中から抜き出で，威厳のある力を持って彼らを威圧する。教会で会衆に向かって次のように言う。

神の説教は魂を打ち壊し，その裂け目から聖霊が入る。その代理人は地震でありこの世の魂を震えさせる。代理人は雷の息子であり曇った良心を追い払う。また，滝のようなもので会衆全員の心を打つ。ある説教では三千人が，ある説教では五千人が，またある説教では，例えばニネベの街のように街全体の心を打つ。また，ライオンのほうこうのようなもの。ユダ族のライオンは獲物を求めるライオンを大きな声で圧倒する。[80)]

現在の職に就く気になった時には上述のような地震や滝になる気概があってバッキンガム公爵に自分を「卑しい蛆虫」や「土くれ」として自己推薦していたのだということを思い起こさせるのである。生涯を通じてダンが取ったそびえ立とうという姿勢は，詩であれ，説教であれ長いこと世俗的な出世に失敗したという気持ちだけから生まれたものではなくその失敗を克服しようとして取らざるを得なかった不名誉な手段の償いの役をになっているのである。

こんな風に見ると説教は詩中に表された憧れの実現として見ることができるかもしれない。詩中での支配欲や個人的な愛を何か地球を超えた意味を持ったものに変質させるようにダンを促した自己拡張，つまり自らの分裂と不安を乗り越えられるような絶対的完全性への飢餓感を見てきた。また，王のような至高のものへのダンの情熱，統語法や韻律によってその能力を生み出すように作られた詩の技法も見てきた。初期の，例えば「床入り」のような詩ではいかに支配欲が侮蔑，辱め，懲らしめの願望という形を取っていたかを見てきた。これらのことを考えれば説教は詩ではなし得なかったことを引き継いで，宗教を後ろ盾に同様に重要な目的を追求したものである。説教でもみじめな裸に近い女性だけではなく全ての官能美を備えた女性に対してどぎまぎするような大げさな表現がなされているので「床入り」に表されたサディスティックな表現すらも当然のごとくに説教に見られる。このように詩と説教の一致を見ていくと初期の更正することのなかったジャック・ダンと重々しいセント・ポール大聖堂のダン博士がいてこの二つを違うものとして見るというのは，またダン自身がそう見ているというのはおかしい。両者は同一の情熱をそれぞれ違った方法で発露させたものであるように思われる。風刺詩もまた人と社会を活気づけ，支配し，優位に立とうとする姿勢を取りたがっている様子が見られることから説教と全く一致するもののように思われる。確かにダンは説教の中で風刺詩をけなしているが，それは説教をするようになって人間特にキリスト教徒を攻撃する風刺詩をけなす余裕ができたからである。ダンは既に風刺詩よりももっと強く精神をむしばむものを見つけていたのである。

もちろんダンにとって重大なことではあったが，ダンを惹きつけたのは神の概念に固有の破壊力だけではない。全能であり永遠であることによって神はもう一つのダンが永きにわたって持っていた様々な要求を満たしてくれたのである。神の永遠が言葉や思想を越えて驚きの念に達するような衝撃を生み出すのに必要な申し分のない的を与えたのである。表現できないものを表現し，考えられないものを考えたいという衝動は必然的にダンの野望の衝動の中でももっとも自滅的なものとなった。しかし，自滅はダンの性格を造って行く上での永年の構成要素であったし，支配力を求めてい

るのと同様に恋愛詩では極めて明らかなことである。詩で明らかな至上のものへの渇望は「忙しやのおろか者」や「おろかな月の下の世界の恋人たち」のみならず言葉に込められ得るものを越えさせようとダンを駆り立てるのである。

すべての韻律，すべての言葉もかなわない，
あの方がいかなる奇跡の女かを告げようとするならば。[81]

結局，彼の愛は言葉だけでなく思想も越えて行く。愛するものが何か分からない。ただ否定するだけだ。

否定としてしか他に表現できないものだけしか
最も完成されたものではないとするならば，
　ぼくの愛がそうだ。
　すべての人が愛するすべてのものを，ぼくは否定する。
最も良く解読できる人がいて
　僕等の知らないもの，ぼくら自身を，知っていたら，
愛するあの無について教えてもらいたい・・・[82]

この「否定的愛」では脅迫観念的ともいえる自己分析癖と知り得ないものを知ろうとする情熱が融合している。この二つは確かに融合している。というのは自分の精神的変化を推測しようとする時はいつも，既に見たように，自己認識ができなくなって止まってしまうからである。それは彼の頭の中に未踏の高みや測りしれない深みがあるからだ。心の中にある霧にはっきりとした光を当てようとするが，自分と同様誰も自分の心はわからない（「ぼくにわからなければ他の誰にもわからないのだから，これにはいまだに悩んでいる」）と言う。しかし，この目論見は彼にもわかっていたが，果たされないことが運命づけられていた。心を読むことはできない。（「心の病には判断するための基準も規則も法則もない。というのは鑑識力，理解力，判断力が判定を下すからである。つまり判定は病そのものによるのである。」）[83] ダンはこのことについていつも敏感であったが，この行き詰まりは我々が通常経験することである。ダンがこれを言葉にして表すと我々も「否定的愛」を我々自身の愛と認めるのである。愛そのものは非常に自然な感情なのでともかく説明できるものとみなすのに慣れてしまっているが，実は愛する人の何を愛するのか，どうして愛するのかわからないのである。

ダンは常に遠ざかる地平線に向かって速度を上げるのが好きで，自分の心を捉えようとするのもその一つである。これが最も純粋な表現形式としての野望の芸術に相当するものである。もう一つは考えられないものの存在を想像力で創りあげることであり，それについて考えようとしていた。『歌とソネット』ではこれは普通愛であるが極端な方法で説明されている。例えば「愛の無限性」ではダンが女性の愛を得るのか，あるいは得ることができるのかということを問題にしている。[84]

最終連に入ると「すべて」というのは余りに限定的な言い方なのですべてはいらないとダンに典型的な結論に至る。

でも，やはりすべてを欲しくはない。
　すべてをもらえば，もうそれっきり。
ぼくの愛は日々大きくなって行くから，
　新しい報酬をあなたは日々貯えなければならない。

これは単に個人的な数のゲームをしているわけではない。恋人というものはこれ以上の愛はなかったし，これからも淀むことなく大きくなって行くことを信じるもの，あるいは信じたくなるものである。これは我々が恋心を計ろうとするとおちいる自己撞着である。が，計りたくなるのは至極当然のことである。子供だってどの子も「僕のこと愛してる？」と尋ねるものだ。

「愛の無限性」には愛を計りたいという気持ちとそういう気持ちを越えたいという衝動との間に緊張感が見られる。「計算」のような詩では数量化させる言葉を使って愛の激しさをいかに数量化しようとしても不充分だということがはっきり示されている。

昨日別れてから最初の二〇年は，
君との別れが信じられなかった。
次の四〇年は昔の愛で生き，
続く四〇年はあなたもずっと続くと望んだ。
百年は涙にくれ，吐息に二百年が吹っ飛び，
千年は何も考えず，何もせず，
ひたすら君を思う，夢現の内に。
次の千年はその思いすら忘れてしまった。
だが，これを長生きと言うな。
死んでぼくは不滅。幽霊は死ねない。[85)]

ここに描かれた年数は合計二千四百年。つまり，二人が別れてからの一時間が千年に当たる。しかし，これを強調するとあまりに数的に正確な詩ということになってしまう。この詩に表されている情緒は数量的というのではなく計れないということである。自由奔放にこれだけぼう大な年月を詩に投げ入れるのは恋人が一緒にいないという経験とは違った，それほど重要ではない，現実の領域に属する時間と数を表すためである。別れている時には我々も皆ダンが言おうとしていることを感じたことがあるし，永い時間の流れを静止させるといった使い古された句を使って表そうとしたこともあるものだ。ダンは時間を静止させているのではなく早めているのである。そのために誰も使ったことのない魅力的で野心的な言葉を捜すという問題に直面しているのである。数は数えられなくするために，量は計れなくするために使われているのである。

こういった方法を使って詩中の愛や女性は普通の考えや言葉では追いつかないものに変えられている。説教では愛や女性が神や永遠に変えられているが，精神領域を飛び出そうという衝動はそのままである。「計算」の孤独な恋人が扱った数えられない数を使う手法は姿を変えて宗教的目的に使われている。相反する二つのことを同時にするのにこれを使っている。会衆に永遠への思いを巡らせるようにしながら同時に永遠を考えることは彼らの思考を超えることだということを銘記させるのである。「何百万を何百万倍してもこの永遠に至る一分とはならない。」永遠は「聖書で一番長い千年のような日ではなく，百万世代のそのまた十倍の世の日。」と会衆に向かって言う。70年生きて地獄に落とされた者は「七百万世代の苦しみ」に会う。神は「天地創造の前に天の無限の，超無限の，想像を越えた空間，何百万年のそのまた何百万年の空間に」おられた。[86]

「超無限」というのはダンの造語でこれを好み再度使用している。ダンヴァーズ夫人追悼説教では永遠は「超無限の永遠」[87] と言う。野望の芸術にとって「超」は特に魅力的な接頭辞である。というのはどんな語を選んでもその語の効力をなくしてしまうほどに優れているからである。ダンが宗教的に感情の高まりを見せる時にはいつも見られることだが，この接頭辞は言葉を越えた言葉を生み出そうとする時に見られるものである。大英辞典のこの接頭辞の項目では「超聖列加入」「超カトリック教徒」「超死」「超教化」「超賦与」「超宗教改革」「超普遍」はダンのものとみなされている。このリストはダンのものであるが，全てではない。説教の一頁を見ただけでも「超奇跡」「超高揚」を見つけ出すことができる。[88] いうまでもないことだが「超無限」が何か特別なことを表しているわけではない。無限とはそれ以上何も加えることはできないということである。しかし，言葉に意味が無いということが，思考では捉え切れないのだから，ダンの目的にはよりかなうものなのである。倍加もまた会衆にショックを与え，果てしなく倍加する宇宙空間の永劫を示唆するのにダンが好んだ手法である。「百万では数えられない，百万の倍でも数えられない」もののことを言っているのだとダンは説明する。人類は六千年前に地球に生まれたが「もし六千年を一分として，その一分一分を何百万世代で二倍しても全ては神の住んでおられるあの永遠から見ると無，単なる無としかならない。」[89]「愛の無限性」で永遠に倍加する愛を望んだ詩人は今や永遠に倍加する至福を約束する。「というのは天国や救済は天地創造にかかわるものではなく，倍加するものである。倍加は死んだら始まるのではなく，永遠に増加，膨張するものである。」[90]

大抵のエリザベス朝の人達と同じくダンは実際の所まじめに計算するために数字を使うことには関心が無かった。一般的にはダンの時代の計算水準は極端に低かった。[91] 算数は学校では教えられていなかった。人文主義者達は計算能力の獲得は機械的なものだとして軽蔑した。エラスムスは生かじりの知識で充分だと言い，アスカムは計算は「他人と生活するのにさしさわりがある」ので，不健全だと考えていた。彼等よりも現代的な精神を持っていた17世紀の教員ですらグラマースクールの生徒に必要なのはアラビア数字の見分けができること位で良いと考えていた。この程度の能力ですら一般的ではなかった。大学に入った学生が本の頁や章がわからないのが普通であった。一般的にこの程度の計算能力では国家経営は容易ではなかった。この時代の人口概算には計算者の風潮を示しており，残っている書類からわかることだが貧民法にかかわる教区民生委員の縦の列の合計数が正しいことはまれであった。

このような状況では単に倍加というだけで会衆をびっくりさせて黙らせたことであろうし，彼のいう大きな数はずっと秘密めいたものに思えたことであろう。ダンはグラマースクールには行かないでカトリック教徒の個人教育を受けていたので計算能力は平均以上であったろうと思われる。しかし，ダンにしても算数はせいぜい好奇心を持って見ていた程度であろうし，数字に関してはいつも無頓着であった。出典を引用する場合あるいは頁や巻数を間違えることはなかったかもしれないが，『神学論集』で統計上の裏付けがあるかどうか疑わないままに世界の人口は何世代もの間同じだと思われると言っている。[92] 説教で見たように明確にするためにというよりは困惑させるために数字を使う方が彼の性格には合っていたのである。彼にとって数字を扱う目的は思想を高めるためではなくそれによってショックを与えることである。

注目に値するのはダンに興味を起こさせた当時の数学的計算で，これは反動主義者でドイツ人のイエズス会士天文学者クリストファー・クラーヴィウスが書いたものである。彼は1607年地球と全恒星との間の空間を満たすのに必要な砂粒の数を概算したものを出版した。（答えを得るために数字１を書いてその後に０を51書いた。）クラーヴィウスは正確さを求めたのではない。関心はこの数字で充分だと確信することであったし，実際空間を埋めた後大量の砂粒が残ると信じていた。慎重に基準として小さな砂粒を選んで計算し宇宙は自分が信じている以上に大きいと思った。彼のモデルはアルキメデスの『アレナリウス』で，アルキメデスのように彼もただ数字の持つ力を説明しようとしただけであった。普通無限と考えられていたものを数字で表すことができるということを示したかっただけのことである。[93]

ダンの目的は正にこれとは逆であった。クラーヴィウスの計算に言及する時には（繰り返し言及しているが）計算全てを否定し，彼に抵抗して数字の不充分さを繰り返し述べている。1627年の説教で行った罪人を永遠に襲う神の罰に関する瞑想がその典型である。

> 人はどれだけの特別な砂粒があれば地球と天という広大な空間が埋まるか計算したことがあり，その数を表すのに数行の０が当てられていることを我々は知っている。しかし，その数の分だけの砂粒があったとしても，さらにその倍あったとしても，その全てでも，その表し得ようもない考えられない程の数でも，この永遠の一分にもならないし，この罪は一分にもならないであろう。この数の砂粒と同じ数の世代の間耐えてもまだ短いのである。[94]

数学者にとっても永遠とはそれほど多い数で表さなければならないものである。

こういった種類の感情の噴出の中にダンが自分や自分が大切に思うものを計算できない知識の世界――認識できない純粋な世界――に置きたがっているということがわかる。既に見たように，「否定的愛」にはこれと同じ思いがはっきりと示されているし，このような詩は『歌とソネット』の詩にも見られる。全ての詩で，自分達が誰で，何者かを示すことを拒否している。例えば「呪い」ではダンの描く女性の正体を推測しようとする人がいればその人を非難するように命じる。

> ぼくの恋人が誰かと推測したり，

考えたり，知っていると夢見るものは・・・[95]

また，「大事業」では知らせなければならないことが知らせられていない。

ぼくが成し遂げた大事業は
　昔の賢者もしなかったこと，
それよりもっと大事なことは
　それを隠し通したこと。[96]

この詩でダンが楽しんでいる「内面の美しさ」は口に出してしまえば神聖を汚すような秘めた清らかな思いとして表わされている。本質的にこの詩は例えば「日の出」や「一周年記念」のような既に見てきた他の詩同様，また，説教の神の力や神の代理人として熱弁をふるうのと同様にダンが傑出していることを告げるものである。傑出しているからこそダンと他の人達や他の人達の物の見方と区別することになるだけではなく，ダンと比較することによって彼等の価値は相対的に下がることになるのである。これがこの章でずっと野望の芸術と呼んできたものの基本である。

また，これはもちろんダンの個人的な不安の指標の一つでもある。最も激しい時には不安を退けようとしてもその不安が伝わってくる詩があることは既に見たところである。ダンの詩は不安が隠されたひび割れの見えない記念碑なのではなく，詩中にはダンの不安な言動が表れているのである。説教では不安や疑念を詩よりは強く押さえようとしているのは明かなことであるとしても静かな説教というには程遠い。ダンの激しい宗教的修辞法は明らかに詩と同様不安を静めることのできない彼の性格を表している。

4．野望の芸術

1）エドワード・エドワードズ著　『ローリーの生涯』　1868年　第2巻　152～153ページ　ボールド，83ページからの引用
2）『風刺詩』　50ページ
3）イーアン・パースンズ編　『アイザック・ローゼンバーグ全集』　1979年　183ページ
4）『自殺論』　137ページ
5）『説教集』　第2巻　266ページ
6）『説教集』　第5巻　106ページ
7）『説教集』　第3巻　139ページ，第6巻　304ページ，第8巻　278ページ，放浪の問題に関してはW.K.ジョーダン著　『英国における慈善事業　1480～1660年』　1959年　第1巻　78～95ページ参照
8）ゴス，第一巻　128ページ
9）『説教集』　第7巻　370～391ページ
10）『説教集』　第9巻　381ページ
11）ロバート・エルロウ著　『英国形而上詩人の私的霊感と時代精神』　パリ　1960年　第1巻　第1章　106～116ページ
12）『エレジー』　37ページ
13）『エレジー』　87ページ
14）『エレジー』　76ページ

15）ゴス，第１巻　174ページ
16）『祝婚歌』　67ページ
17）ゴス，第１巻　184ページ
18）『説教集』　第８巻　332ページ
19）エルロウ　前掲書　第１巻　第１章　107ページ
20）『エレジー』　61～62ページ
21）R.F.ジョンズ編　『17世紀』　ヘレン・C・ホワイト著　「ジョン・ダンと精神修養の心理学」　カリフォルニア　スタンフォード　1951年　357ページ参照
22）『説教集』　第８巻　75ページ
23）『祝婚歌』　43，42，24，45ページ
24）ジョンソン，第１巻　133ページ
25）ウィリアム・エムプソン著　「ダンと修辞学的伝統」　*Kenyon Review*　11　1949年　579ページ
26）マーリアス・ビューリー著　「ダンの詩における宗教的冷笑」　*Kenyon Review*　14　1952年　619～646ページ
27）D.W.ハーディング著　「ダンの詩におけるテーマの一貫性」　*Kenyon Review*　13　1951年　427～444ページ
28）リチャード・E・ヒューズ著　『魂の遍歴』　1969年　を参照
29）フランク・マンリー編　『周年記念の歌』　メアリーランド　ボールティモア　1963年
30）B.K.レワルスキー著　『ダンの「周年記念の歌」と讃歌』　ニュージャージ　プリンストン　1973年
31）ゴス，　第１巻　302，306ページ
32）R.C.ボールド著　『ダンとドルアリー家』　ケンブリッジ　1959年　26ページ
33）同上，88ページ
34）『デイム・ヘレン・ガードナーに捧げられた英国ルネッサンス研究』　I.A.シャピロウ著　「ダンの風刺詩の制作年代に関して」　オックスフォード　1980年　141～150ページ参照
35）『エレジー』　14～16ページ
36）『説教集』　第９巻　79ページ
37）R.B.マッカロウ編　ナッシュ　『作品集』　オックスフォード　1958年　第４巻　397～416ページ
38）『エレジー』　72～73ページ
39）『聖なる詩』　33ページ
40）『エレジー』　71～72ページ
41）シェイクスピア著　『アントニーとクレオパトラ』　第４幕　第14場
42）D.H.ロレンス著　『３つの短編』　ペンギン版　1970年　79～80ページ
43）『説教集』　第７巻　128ページ
44）『説教集』　第９巻　64ページ
45）『説教集』　第１巻　223ページ，第５巻　85ページ　第１巻　247ページ，第４巻　347ページ
46）『説教集』　第９巻　129ページ
47）『説教集』　第３巻　289ページ，第４巻　137・250ページ，第３巻　184ページ，
48）『説教集』　第３巻　290ページ
49）『説教集』　第６巻　245ページ
50）『説教集』　第６巻　283ページ，第７巻　157ページ
51）ベアド・D・ホイットロック著　「司教地方代理と自作農」　*N&Q*　199　1954年　374ページ
52）『説教集』　第２巻　303ページ
53）『説教集』　第２巻　290ページ，第９巻　328ページ
54）『説教集』　第９巻　379ページ，第６巻　303ページ，第３巻　270ページ
55）『説教集』　第９巻　379ページ，第３巻　58ページ
56）『説教集』　第４巻　329ページ
57）『エレジー』　61ページ
58）ミルトン著　『散文全集』の中の「キリスト教教義」第１巻第５章及び第６章　コネティカット　ニューヘブン　1973年

59)『説教集』 第4巻　28ページ及び33～34ページ
60)『エレジー』 24ページ
61) T.M.レイゾー編　コールリッジ著 『雑批評』 1936年　131ページ
62)『エレジー』 23ページ
63) ピーター・A・フィオレイ編 『名誉なんてたかだか』 ジョウゼフィーン・マイルズ著 「ダンの読者にとってのもし，そして，しかし」 ペンシルバニア　ステイト　カレッジ　1972年　272～291ページ
64)『祝婚歌』 30ページ
65)『エレジー』 52ページ
66) クリストファー・リックス編　テニソン著 『詩集』 1969年　496ページ
67)『祝婚歌』 30ページ
68)『聖なる詩』 28ページ
69)『神学論集』 36ページ
70)『風刺詩』 76～77ページ
71)『聖なる詩』 30～31ページ
72)『聖なる詩』 13ページ
73)『エレジー』 63ページ
74)『エレジー』 69ページ
75)『エレジー』 85ページ
76)『説教集』 第7巻　152ページ，第9巻　195ページ，第2巻　147・194ページ，第1巻176～177ページ，第7巻　80ページ，第2巻　86ページ
77)『説教集』 第8巻　128ページ，第7巻　65ページ
78)『説教集』 第7巻　365～366ページ，第3巻　191ページ
79)『説教集』 第8巻　106ページ
80)『説教集』 第7巻　396ページ
81)『エレジー』 90ページ
82)『エレジー』 56ページ
83) ゴス，第一巻　184ページ
84)『エレジー』 77～78ページ
85)『エレジー』 36ページ
86)『説教集』 第7巻　78・138ページ，第6巻　278・363ページ
87)『説教集』 第8巻　92ページ
88)『説教集』 第10巻　243ページ
89)『説教集』 第3巻　349ページ，第8巻　76ページ　他の例は第2巻　139・227・357ページ参照
90)『説教集』 第3巻　339ページ
91) W.K.ジョーダン著 『英国の哲学　1480～1660』 1959年　第1巻　36・129ページ，E.T.カンパニャック編ジョン・ブリンズリー著 『劇』 1917年　25ページ，フォスター・ワトスン著 『英国における新しい科目の教え始め』 1909年　254，277～336ページ
92)『神学論争』 72ページ
93) クリストフォーリ・クリービィ著 『ヨアニスの天体層における聖なる鷲の解釈書』 ルグディニ　1607年　253ページ，G.アンダスン訳 『アルキメデスの数学教師』（クラーヴィウス論文の翻訳を含む）1784年及びC.M.コーフィン著 『ジョン・ダンと新哲学』 ニューヨーク　1958年　88ページ参照
94)『説教集』 第7巻　368ページ
95)『エレジー』 40ページ
96)『エレジー』 57ページ